



# 令和3年度 都立小石川中等教育学校 学校経営報告

東京都立小石川中等教育学校

校長 鳥屋尾 史郎

## 1 今年度の取組と自己評価

### (1) 教育活動への取組と自己評価

#### 学校経営・組織体制

##### <目標>

- (1) 教職員の経営参画意識を一層高め、OJTを通して経営組織体制を強化する。
- (2) 小石川教養主義、理数教育、国際理解教育を全教職員で推進し、課題の解決及び連携の促進を図る。

##### <方策>

- (1) 主幹教諭及び分掌主任が経営計画の進行管理を行い、定期的に進捗状況を報告する体制を推進する。
- (2) 教務部の下に「新カリ-PJ」、SSH部の下に「SSH-PJ」、国際部の下に「グローバル-PJ」を設置し、それぞれの課題解決に当たるとともに、各分掌、学年、教科との連携を図る。
- (3) 教科主任会議及び教科会を活用して、組織的な教科指導体制及び教科指導に関する人材育成を推進する。
- (4) 職員室を学年活動の拠点となるように機能させ、サポート体制及び教育活動の充実を図る。
- (5) 経営企画室職員各職層に応じた資質・能力の向上を図り、経営参画意識を高める。レベルの高い教育活動を推進するため、予算執行や施設整備等、経営企画室所掌事項において改善を図る。
- (6) 教務部及び進路部が連携し、大学入学共通テスト及び新学習指導要領に対応した教育課程の編成に計画的に取り組む。
- (7) PTA及び紫友同窓会と連携し、高い教育効果が期待できる取り組みを行う。
- (8) 学校業務の効率化を図り、教職員のライフワークバランスを推進する。

##### <取組と自己評価>

- (1) 各分掌主任が学校経営計画に基づき業務等の進行管理を行うとともに、その進捗状況を企画調整会議、職員会議を通して適宜報告するとともに学期毎に学校運営連絡協議会で報告し、課題の共有や解決策の提示を行った。
- (2) SSH事業に関する企画、運営、連絡、調整等は、SSH部を中心に実施した。SSH事業の検討及び研究開発については、「SSHプロジェクト委員会(SSH-PJ)」や各教科会を通して推進した。また、「小石川フィロソフィー担当者会議」を合わせて年7回開催し、課題研究の指導法・評価についての情報交換を行った。以上のようなプロジェクトを通して、SSH事業を全校体制で、組織的に推進することができた。  
後期新教育課程の編成とSSH校指定4期申請のためのカリキュラム編成が同時期となったため、SSH部と新カリキュラム作成プロジェクト委員会(新カリPJ)が連携し、新教育課程を定めた。  
グローバルPJを年間11回開催した。
- (3) 来年度から施行される後期教育課程での観点別評価および5段階評価の在り方、また今年度から施行している前期新教育課程における観点別評価と5段階評価に関する課題について、教科主任会議での議論を経て教科会を行い、全職員での問題共有とあるべき方向性の共通理解を行った。
- (4) 各学年、担任と副担任が学級運営を協働し、副担任が適宜サポートできる体制が整っている。若手教員が副担任となることによって、経験のある主任教諭や主幹教諭の学級運営について身近で学ぶことができている。
- (5) 教育活動に関する情報共有を行い、予算執行や施設設備等について教員と連携しながら進めることができ、これまでの課題の改善につながっている。
- (6) 新学習指導要領で大幅に変更する後期課程用教育課程は、中等教育学校の教育課程編成上の特例やSSH校の独自カリキュラム編成への要請を活かしつつ、大学へ進学してからも伸びることのできる教養教育を眼目とする教育課程を作り上げた。
- (7) 生徒の活躍に対する懸垂幕や特色ある教育活動に対する支援をPTAや紫友同窓会から得ることによって、充実した教育活動を実施することができた。また、学校の取組については、PTA運営委員会や紫友同窓会への報告書を通して報告している。
- (8) 会議資料のファイルサーバー上での共有や、授業の教材の共有、Teamsを活用した授業や生徒への配信の工夫などにより、学校業務を改善し、効率化を図ることができつつある。今後、一層のライフワークバランスを推進していくことが継続した課題である。

#### 学習指導

##### <目標>

すべての教科・科目で基礎・基本の徹底を図るとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力及び主体的に学習に取り組む態度を育成し、学力の向上を図る。

#### <方策>

- (1) 習熟度別授業、少人数授業等を通して、基礎・基本を徹底し、様々な補講、講習等の充実を図る。
- (2) 「小石川セミナー」を一層充実させる。
- (3) 小石川教養主義に基づく本校独自の教育課程の特色を一層充実させる。
- (4) 生徒に予習・復習の学習習慣を定着させ、自宅学習時間の確保を図る。
- (5) 教育課程及び授業時間数を適正に管理する。
- (6) 「小石川フィロソフィー」等における学校図書館や外部図書館の活用、「ビブリオバトル」の充実などを通して、より質の高い読書活動を推進し、生徒が主体的に学習に取り組む態度を育成する。

#### <取組と自己評価>

- (1) 習熟度別授業は英語では1～6年、数学では1～5年で実施している（2クラス3展開、4、5年の数Ⅰ数Ⅱおよび6年のコミュニケーション英語Ⅲは2クラス4展開）。少人数授業は、国語（古典）で4、5年に実施している。土曜講習については、地歴公民が中心に行った。夏季休業日中の講習・補習については、進路指導部がとりまとめて、全学年で実施した。
- (2) 今年度は2回の小石川セミナーを実施した。1学期には早稲田大学文学学術院准教授を招き、「性の多様性に学ぶ—差別は良心でなく知識で防ぐ」の演題でご講演いただいた。2学期には高等難民弁務官事務所職員の方を招き、「熱い心と冷たい頭を持って一人道支援の最前線を知り、世界を見る目を鍛える」の演題でご講演いただいた。  
全校生徒対象の「グローバルセミナー」をオンラインで1回開催した。
- (3) 新教育課程は各教科・科目のバランスを保ち、文理の別なく広く深く学ぶ小石川教養主義を体現するものとなった。
- (4) EdTech 推進チームが中心となって、Teams を用いたオンライン授業を多くの教員が実践できるようにした。緊急事態宣言中は多くの教員が、Teams を用いたオンライン授業を実施し、生徒が時間割通りに授業を受け学習する態勢をつくることができた。なお、対面授業は再開したが、オンライン授業のためのレンズ、マイクを教務部で購入し、オンライン授業にそなえている。  
1学年：個別の日記を用いて学習状況の管理を図った。  
2学年：「毎日の積み重ね」による1週間の振り返りや計画の見直し等を行わせた。  
3学年：考査後の解き直しレポートを5回実施した。  
5学年：4月当初進路希望調査を行い、2者面談をすることで自分の進路に考え、目標に向かって準備を始めるための指導を行った。意識的に家庭学習に取り組める生徒が増えた。また、6年次の選択特別講座の決定に伴い3者面談を行い進路の方向性を家庭とも確認を行って今後に生かしていく。
- (5) 次年度の教育課程届を作成するとともに、定期的に授業時間数の管理を適切に行った。行事等に伴う臨時時間割も授業ごとの過不足がないように調整した。
- (6) 東洋文庫と生徒全員の利用契約を行い、学問への意識づけをしやすい環境を整えた。「小石川フィロソフィー」開始時における共通講座では、司書作成による、資料の検索方法等のガイドブックを配布し、図書館の活用方法を説明した。また、「小石川フィロソフィー」の授業時間は、優先的に図書室を使用できるようにし、課題研究で積極的に活用した。今年度の図書館での図書購入冊数は1070冊、ビブリオバトルは3回開催した。

## 生活指導

#### <目標>

生徒にソーシャルスキルを身につけさせる指導を推進する。

#### <方策>

- (1) 時間厳守や身だしなみなど、最低限のルール、マナーの指導を徹底する。
- (2) 日常の教育活動を通し、あいさつを励行するなど、社会性や自律性を育成する。
- (3) 思いやりの心や奉仕の精神を育成し、信頼し合える人間関係を構築させる。
- (4) 美化活動や環境保護に対する生徒意識の向上と公私関わらず物品管理の徹底を指導する。
- (5) 関係機関と連携し、交通安全、薬物乱用防止、携帯電話の危険性などをテーマにセーフティー教室を実施する。また、文京区青少年問題協議会と連携し、地域の情報を共有して安全教育を推進する。
- (6) 体罰の未然防止に向けた教員研修を通して、生徒理解と信頼関係に基づく生活指導の徹底を図る。
- (7) いじめの未然防止、早期発見、早期対応の徹底を図る。「学校サポートチーム」の助言・支援を活用する。

#### <取組と自己評価>

- (1) 朝の検温時にあいさつや身だしなみについて声掛けを行った。しかし後期生になり自主的な判断が求められる場面において、より一層の成長を促す指導が必要と感じる場面がみられる。前期・後期という分け方ではなく、段階的な指導方法を構築していくことが課題である。  
1学年：入学後のオリエンテーション、学年集会、道徳などを通してソーシャルスキルの習得を促した。  
2学年：日頃からのネクタイ等の指導を学年担任中心に行った。  
3学年：提出物を含め、時間厳守は機会を見つけ指導を行った。  
4学年：身だしなみに関する指導を折に触れて実施した。
- (2) 挨拶をする生徒が増えてきている。しかし授業などでの関わりのない先生や来校者に対して自らあいさつをするという習慣は十分ではない。今後もソーシャルスキルアンケートを通じて望ましい態度を提示し、社会性や自律性を高めていく。  
1学年：授業前後や廊下でのあいさつなどを励行した。  
3学年：「誰に対しても自分から挨拶すること」を日頃から伝え続けた。
- (3) 4年生を対象に社会参加の時間を通じて思いやりや奉仕について学んだ。

- (4) 教室にあったゴミ箱を廊下に移動し環境保護について対する意識を高める取り組みを行った。また、落とし物について生徒玄関前の目立つ場所に展示することで、落とし物の多さに生徒が課題意識を持つような取り組みを行った。
- (5) 交通安全週間において、学校付近の交差点において、地域と連携した安全指導を行った。1学期末に薬物乱用防止教室を実施した。また3月にSNSの利用をテーマにセーフティー教室を実施した。文京区青少年問題協議会に出席し情報共有を行った。
- (6) 7月に全教職員を対象に体罰の未然防止に向けた校内研修を行った。また、12月には、全校生徒及び全教職員を対象にした体罰に関する調査を行い、体罰防止に努めた。さらに、自己申告の面接時に、全教職員に対して、生徒理解と信頼関係に基づく生活指導の重要性について意識啓発を図った。
- (7) 4月に「学校いじめ対策委員会」を設置し、7月、11月と3月に委員会を実施した。「学校生活アンケート」を6月、10月と1月に行ない、問題があると答えた生徒には声掛けするなど各クラス担任が迅速に対応することでいじめの未然防止、早期発見、早期対応の徹底を図った。

## 特別活動・部活動

### <目標>

学校行事や部活動、委員会活動等への生徒の主体的な取り組みを通して、リーダーシップを発揮できる人間性と最後までやり抜く力を育む。

### <方策>

- (1) 学校行事や部活動、委員会活動等の企画・運営を通して、生徒の主体性や創造性を育てる。特に行事週間などにおける異年齢集団との交流を通して、生徒が自ら考え、判断し、集団の中で積極的に行動できるリーダーとしての素養を育成する。
- (2) 学校行事を地域等に公開する中で、様々な人とのふれあいや交流を通して、豊かな人間性の育成を図る。
- (3) 部活動に関する部費の適正管理を徹底する。

### <取組と自己評価>

- (1) 後期生においては行事の運営において学年を超えて話し合い、企画・運営を行った。また前期生においては対面式に向けて学年を超えて協力しながら準備を進めている。
  - 1 学年：オンラインを駆使しての行事週間となった。多くの生徒が主体的に活動し、参加しやすい工夫がみられた。
  - 2 学年：学年HR委員に学年レク・学年集会の企画等を行わせ、行事運営力を向上させた。
  - 3 学年：HR委員を中心に学年レクを2回実施した。また3学期は学年末考査に向けてのクイズ大会や美化習慣などHR委員を中心に学年行事を実施した。
- (2) 新型コロナウイルス感染症の感染予防対策のため、学校行事の一般公開は行わなかった。
  - 1 学年：感染症対策のため、学校行事の一般公開は行えなかった。
  - 3 学年：職場体験が中止だったため、地域との交流は行えなかった。
- (3) 全ての部活動において、年度当初に「部活動の指導方針等」を策定し、適正な活動を行った。また、部費を徴収している部活動においては、通帳、現金出納簿、領収書による管理を徹底するとともに、副校長が現金出納簿を点検し、適正に管理されていることを確認した。

## 健康づくり

### <目標>

心身ともに健康で、思いやりがあり、人間性豊かな生徒を育てる。

### <方策>

- (1) 学校保健計画に基づく保健指導を通して、生徒の心身の健康と体力の維持・向上を図る。
- (2) 学習環境の整備と美化に努めるとともに、健康に関する生徒の自己管理能力を高める。
- (3) スクールカウンセラー及び家庭と連携し、発達段階に応じた課題に学校全体で取り組む。
- (4) 生命尊重の視点に立った生徒指導を行い、日常生活の中で生徒の変化を敏感に捉えるとともに、定期的に2者面談、3者面談を実施し、生徒の様子を適切に把握する。
- (5) 学校給食運営委員会を通して前期課程給食の運営状況を把握するとともに、給食を通じた食育を推進する。
- (6) 体育授業にパラスポーツを取り入れることで、誰もがスポーツを楽しみ、自ら進んで体力の向上を図ろうとする態度を育てる。

### <取組と自己評価>

- (1) 4月に定期健診を実施するとともに、スクールカウンセラーによる全員面接を実施した。また、個々の生徒に対しては保健室対応の中で、心身の健康の大切さ（睡眠休養の必要性、ケガの手当て、ストレス昇華についてなど）を伝えるため、その状況に応じた保健指導を行った。
- (2) ゴミの分別指導、ゴミ箱設置場所の見直し、清掃用具の交換、落とし物を探しやすくする工夫など学習環境の美化に取り組んだ。
- (3) スクールカウンセラーからの情報をもとに、学年や保護者、保健室が連携し課題の解決に取り組んだ。
- (4) 1 学年：学校生活アンケートのほか、各学期の2者面談や、夏期の3者面談を実施し、生徒の変化を注視しながら生徒に寄り添った指導を行った。

- 2 学年：三者面談を行い、状況や個別に応じて二者面談も行った。
- 3 学年：全員対象の二者面談を 1 回、三者面談を 1 回実施した。
- 4 学年：1・2 学期に生徒全員の二者面談、夏季休業中に三者面談を実施した。
- (5) 年間 3 回給食運営委員会を実施し、感染症対策などについて確認し、後期生を含めて昼食時の感染防止対策を行った。またランチボックス通信を発行し、和牛をテーマに食育ならびに食品の廃棄についての指導を行った。
- (6) シッティングバレーボールやポッチャ等のパラスポーツをとおり、スポーツを楽しみながら行うことで体力の向上を図ることができた。

## 進路指導

### <目標>

キャリア教育を推進し、生徒一人一人の進路希望実現に向け、学校全体で取り組む。

### <方策>

- (1) 生徒の進路希望実現に向け、進路指導部主体で進路指導計画を立案し、学年及び教科と連携して実施する。
- (2) 前期課程では、健全な職業観育成に主眼を置いたキャリア教育を実施する。
- (3) 外部模試の分析結果を教科にフィードバックして、教科指導の改善を促す。
- (4) 「進路の手引き」を活用して、生徒の自己実現を積極的に支援する。
- (5) 各教科による模試の答案分析、大学入試問題の研究及び指導内容・指導方法の改善、年間指導計画や特別選択講座の内容の改善を推進し、教科指導力の向上を図る。
- (6) シラバスに基づき、授業を実施し、評価、改善するマネジメントを定着させる。
- (7) 長期休業日の有効活用を図るため、進学向け講習を企画・立案し、生徒への提示、調整等を行う。
- (8) 同窓会と連携して、研究室訪問や分野別大学模擬講義を実施する。
- (9) 自習室及びチューターの積極的活用を推進する。

### <取組と自己評価>

- (1) 生徒の進路希望の実現に向けて、進路指導部が主体となって進路指導計画を立案し、学年及び教科と連携して実施した。1 年生では、寺子屋や学年の進路行事を通して、自分の進路に関心を持ち、進路選択ができる土台作りをした。4 年では LHR を活用した進路指導主任による講演等、5 年生では、特別選択講座の選定に際し、保護者を含めた形での面談等を実施しながら、自身の進路を考えさせた。興味・関心と本人の特性等を考慮しながら助言を行い、講座選択および進路意識の涵養に努めた。
  - 1 学年：道徳や寺子屋を通して、自分の進路に関心を持ち、進路選択ができる土台作りをした。
  - 3 学年：進路部と連携をし、進路講話を 1 回実施した。また職場体験の事前学習を 2 回実施した。
  - 5 学年：進路指導部と連携し、4 月～5 月にかけて進路室訪問を行った。結果、進路室利用のハードルが下がり利用者が増えている。また、進路部の先生方への相談も気軽に行っている。また、1 2 月にはチューターに進路講演を行った。
 5 年の最後の時期や 6 学年をどのように過ごすか具体的にイメージができた生徒が多かった。また、チューター利用が増えた。
- (2) 1 年生を対象として、1 月に東京青年会議所文京地区委員会と連携のもと職業講話「東京寺子屋 2021」を行った。11 業種 13 名の講師を迎えて講演をして頂き、生徒の職業意識を高めることができた。
  - 2 年生を対象として、6 月に予定していた職場体験は新型コロナウイルス感染拡大により次年度に延期した。昨年度から今年度 1 1 月の延期とした 3 年生職場体験は 3 学期 2 月にいったん延期し、準備を進めたが再度新型コロナウイルス感染拡大により中止となった。1 1 月の延期の際、代替行事として学年主催の進路講話を行い、また 2 月には体験予定先の職業調べを行った。
- (3) 生徒の多様な進路志望に対応するため、弁別基準を異にする複数の外部模試を計画的、効率的に組み合わせて実施し、分析の結果、顕かになった課題を教科にフィードバックして、指導の改善を促した。
- (4) 進路実現に向けた後期課程用「進路の手引き」を用いて、進路意識を喚起した。
- (5) 各教科・科目の到達目標を「大学入学共通テスト受験者のうち得点率 80% 以上の者が各教科・科目受験人数の 63% を超える授業」と設定し、授業内容や指導方法の基本設計を促した。さらに、各教科で実施した東大模試の答案分析や大学入試問題の研究を通して、最終学年の特別選択講座の内容改善や、5 学年以前の年間指導計画での取り組みを促した。
  - 前期課程では、学年末のアドバンス模試及びその分析会を通じ、基礎学力を基にした発展的学力について検討を行っている。また、その結果を各教科の指導にフィードバックするとともに、三者面談などにも活用している
  - 特別選択講座は、理数系講座の単位増により、理数系受験生が文系科目を選択することが難しくなっているため、正規の講座の他に放課後や土曜の補講を行い、受験に必要な力を養成している。
- (6) 各教科で作成した 6 年間のシラバスに基づき、年間指導計画と週ごとの指導計画とを連動させて作成し、それを基に授業を実施し、評価、改善を行っている。
  - 新教育課程における年間指導計画と週ごとの指導計画とを連動させて作成し、それを基に授業を実施し、評価、改善を行うための道筋をつけた。
- (7) 生徒が長期休業日を有効活用し、学力の向上を図れるように、早い段階で進学向け講習や補習の計画を立案して提示した。特に 6 年生が夏季休業日の計画を立てやすいよう、6 月段階で講習計画暫定版、7 月段階で同確定版を作成した。当初オンラインでの実施も検討したが、定着度を勘案して通常形態の講習とした。
- (8) 3 年～6 年を対象とした研究室訪問を 1 1 月の公開授業振替休業日に企画した。本校 O B の東京大学大学院教授の尽力で、東京大学柏キャンパスの基盤科学研究系複雑理工学専攻で、また、同じく本校 O B の東京工業大学教授により、東京工業大学生命理工学院および工学院で貴重な体験をすることができた。生徒たちは、積極的に質問や議論を行っており、研究室訪問が自分

の適性を考えるきっかけとなるなど、将来の目標や上級学年での科目選択の際に活かされている。

4年～5年対象の「分野別模擬講義」を同窓会とも連携して12月22日に実施した。コロナ禍にありオンラインでの開催を検討したが、生徒の受ける刺激を勘案して、同窓会や大学と折衝した結果、12講座すべてにおいて教授が来校しての実施となった。この模擬講義にあたっては、講師にアクティブラーニング的なアプローチを依頼し、事前課題や参考文献を多くの講座で示して貰った上で当日に臨むようにしたので、質疑応答など生徒の反応も良く、講師からも高評価を得た。

(9) 自学自習に活用する通常型の第一自習室とは別に、チューター(=学習助言者)を配置し質問に対応可能な第二自習室を設置した。生徒の積極的な活用を促した。新型コロナに伴う休校に至るまでの全ての休日に第一自習室を開いたが、休日に登校して自習室を利用した者は、秋以降連日20名を超えるようになった。

## 募集・広報活動及び地域交流

### <目標>

- (1) 募集・広報活動を全教職員の連携・協力の下に行い、本校の求める応募者の増大を図る。
- (2) 地域交流を推進し、社会参加に関する生徒の意識及び災害など非常時の対応能力の向上を図る。

### <方策>

- (1) HPを通じた教職員の情報発信能力を高め、本校の特色ある教育実践を積極的に発信する。
- (2) 全教職員の連携・協力の下に、授業公開、学校説明会等を実施して、本校の特色ある教育実践を発信するとともに、本校の求める応募者の増大を図る。
- (3) 受検希望者の本校に対する理解を深めるため、小学生の来校機会を充実させる。
- (4) 防災教育推進委員会の活用及び宿泊防災訓練の実施等を通して、非常時に対応できる資質・能力を高める。
- (5) 地域と連携した活動を通して、生徒の社会参加意識を高め、進んで社会に貢献しようとする態度を養う。

### <取組と自己評価>

- (1) HPの新規ページの作成や既存ページの更新を積極的に行い、HPを活用した情報発信に努めた。
- (2) 授業公開は、新型コロナウイルス感染症拡大への対応として、1学期授業公開では昨年来のコロナ禍で一度も参観できていない1、2年生の保護者のみを対象に、時間当たりの人数を絞った形で実施した。2学期、3学期の授業公開は見送らざるを得なかった。
- (3) コロナ禍のため、学校説明会の代替企画として6年生児童を対象とした学校見学会を年3日、全12回実施した。授業公開の一般公開は行わなかった。
- (4) 感染症予防を考慮しながら、可能な範囲で効果のある避難訓練の方法を模索し、防災教育推進委員会での検討を経て避難訓練を実施した。また4年生を対象に3.11を現地で経験した人の講演を防災講話で行い、防災意識の向上に努めた。4、5年生を対象に避難所設営ゲームを3月に行った。
- (5) 「人間と社会」の夏季休業中の社会体験活動は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で見送らざるを得なかった。

## 理数教育・SSH

### <目標>

- (1) 第3期SSH事業を適切に進めるとともに、第4期に向けた準備を進める。
- (2) 理数教科科目に対する生徒の興味関心を高める。

### <方策>

- (1) 第3期SSH事業当初計画に従い、様々な理数系カリキュラム等の開発・改善を進める。
- (2) 大学との連携や接続の一層の強化を図る。
- (3) 教員の指導力の向上を図る。
- (4) SSH運営指導委員会から指導・助言を受け、組織的に事業を展開するとともに、第3期SSH事業だけでは不十分と思われる課題についての精査を始める。

### <取組と自己評価>

- (1) 学習指導要領を超える高度な理数科目(Advanced科目)を1年生から5年生まで実施した。すべての生徒が理数分野を深く学び、理科は中学校1年生から物理、化学、生物、地学の4分野専門の教員が指導し、数学は全員が数学Ⅲの極限まで学んだ。6年生では、特別選択講座を理科7、数学5講座開設し、高度な学びに結びつくカリキュラムを整備した。
- (2) 高大連携・共同研究に関する協定を結んでいる東京農工大学をはじめ、総合研究大学院大学、立命館大学、東京大学と連携し、科学系部活動で指導していただいた。また、大学や企業の方をお招きし、研究活動についてお話を伺う「サイエンスカフェ」を7回実施し、大学との連携を深めた。グローバルサイエンスキャンパスに参加を希望する生徒への支援も積極的に行い、今年度は、東京大学のプログラムに1名が参加した。小石川フィロソフィーVにおいて、都立大学の教授に、生徒から連絡を行い、アドバイスをいただくことができた。また、深田地質研究所にも相談を行うことができた。
- (3) 課題研究の担当者会議を定期的で開催し、指導実践や評価に関する情報を共有した。このことにより、SSH事業の効果が教科の授業に波及し、指導力の向上に役立った。

(4) 運営指導委員会を年3回開催し、SSH事業全体に対する指導・助言を受けた。第Ⅲ期SSH事業の総括および第Ⅳ期申請に向けた指導を受け、事業改善に役立てた。

## 国際理解教育

### <目標>

国際社会に生きる日本人として求められる幅広い教養と豊かな感性及び高い英語力に基づくコミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、グローバルな視点でものごとを考えられる人材を育成する。

### <方策>

- (1) グローバルP Jが中心となり、「東京グローバル10」事業を計画的に実行する。
- (2) 授業を通して、4技能バランスのとれた英語力を習得させ、国内語学研修、海外語学研修、各種検定試験などを通して、段階的に英語の運用能力を高める。
- (3) シンガポールへの海外修学旅行（5年）を行い、現地の連携校で研究内容について発表を行う。
- (4) 海外からの訪問を積極的に受け入れ、国際交流を推進する。
- (5) オリンピック・パラリンピック教育を通して、ボランティア・マインドや障害者理解、スポーツ志向、日本人としての自覚と誇り、豊かな国際感覚等の資質や態度を育む。

### <取組と自己評価>

- (1) グローバルP Jが中心となり、「東京グローバル10」の予算執行の計画・立案を行った。グローバルセミナーを年間1回、グローバルカフェを年間11回開催した。
- (2) 2年国内語学研修は3日間、日帰りを実施した。3年海外語学研修は中止になり、国内語学研修に変更し、春季休業中に4日間実施した。4年希望者で春季休業中にエンパワーメントプログラムを実施。英語の授業では、1年レシテーションコンテスト、2年スキットコンテスト、3年リサーチ&プレゼンテーション、4年スピーチコンテスト、5年ディベートを組織的、継続的に実施し、4技能5領域のバランスの取れた指導を行った。実用英語技能検定試験は全校生徒が年間1回以上受検を推奨している。4年・5年はIELTS全員受検を必須とした。  
2学年：スキットコンテストでスピーキング力を高め、英語検定によりリスニング・ライティング力を向上させた。  
3学年：海外語学研修の代わりに国内語学研修を実施した。リサーチ&プレゼンテーション実施した。
- (3) 5年シンガポールへの海外修学旅行は中止になったが、SSHと連携を図り、小石川フィロソフィーVの研究の要約を英語で発表するプレゼンテーションワークショップを実施。生徒1名に対して外国人講師1名につき一人15分の個人指導を全員対象で実施し、英語でのプレゼンテーション能力の向上に関して一定の成果を得た。海外修学旅行の代替案として、シンガポールの交流校（2校）とのオンライン交流を実施した。
- (4) コロナ禍にあって海外の学校との国際交流はできなかったが、グローバルカフェ、エンパワーメントプログラム、3年国内語学研修で海外からの留学生と交流した。また、海外語学研修と海外修学旅行の来年度以降の再開準備に向けて、南オーストラリア州教育省やシンガポールの交流校との連携を図った。
- (5) Welcome to Tokyoを用いて、授業等を通して、国際理解の資質や態度を育む指導を行った。オリンピック・パラリンピック教育については、保健体育、家庭科、総合的な探究の時間、芸術科、社会科等の授業、さらには国内語学研修などで、各学年で約58～201時間の関連する授業および行事を実施した。

## (2) 重点目標と方策

## 学校経営・組織体制

### <目標>

- (1) 本校の特色ある教育活動「小石川教養主義」「理数教育」「国際理解教育」を全教職員で推進する。
- (2) 企画調整会議での積極的な協議、意見交換を通して、教員の方向性を揃える。
- (3) 学校業務の効率化を図り、ライフワークバランスを推進する。

### <方策>

- (1) 理数教育については「SSH-P J」、国際理解教育については「グローバルP J」を中心に、各分掌、学年、教科と連携した上でそれぞれ推進する。
- (2) 「新カリ-P J」が中心となり、本校の特色を継承した新しい教育課程を編成する。
- (3) 各種会議を効率的・効果的に運営する。
- (4) 教職員それぞれに応じた生活と仕事との両立・調和がとれるよう働き方を改善する。

### <数値目標>

- (1) 企画調整会議は45分以内（前年度46.8分）、職員会議は60分以内（前年度44.6分）を目途に終了できるよう計画的に運営する。

### ＜取組と自己評価＞

- (1) 「SSH-PJ」を中心に、第IV期申請に向けた取組を推進した。SSH-PJの議論をもとに、理科・数学科を中心に令和4年度から実施される「理数探究カリキュラム」の開発を行った。  
グローバルPJを年間11回開催し、管理職・教務部・SSH部・国際部・英語科との連携を図り、横断的な取組を行った。
- (2) 後期新教育課程の編成とSSH校指定4期申請のためのカリキュラム編成が同時進行であったため、SSH部と連携し、小石川教養主義、高度な理数教育、国際理解教育という本校の特色をバランスよく体现した新教育課程を定めた。
- (3) 企画調整会議での検討事項や連絡・報告事項を事前に管理職に相談して進めるよう促すとともに、各分掌主任が見通しをもって適切な時期に職員会議で全体に周知できるようスケジュールを示しながら全体を運営した。
- (4) 育児や介護などへの理解を示し、相談や支援体制を整えることによって、生活と仕事の両立・調和がとれるような働きやすい環境を維持した。

### ＜数値目標＞

- (1) 企画調整会議は45分以内（前年度46.8分）、職員会議は60分以内（前年度44.6分）を目途に終了できるよう計画的に運営する。
- (1) 企画調整会議（36回）の平均所要時間は45.9分、職員会議（19回）の平均所要時間は55.2分であった。

## 学力向上に向けた授業改善

### ＜目標＞

- (1) 「授業第一主義」を実践する。
- (2) 生徒の学力の状況及び推移を把握し、授業改善に反映させる。
- (3) 授業力の向上に努める。
- (4) 生徒の進路希望の実現に必要な学力の土台をつくる。

### ＜方策＞

- (1) 基礎・基本の徹底を図るとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力及び主体的に学習に取り組む態度を育てる授業づくりに努める。
- (2) 模試の結果を活用した分析会を実施し、授業改善に反映させる。
- (3) 校内外における授業見学や研究協議への参加、大学入試問題の分析等を通して、授業力の向上を図る。
- (4) 5教科について、生徒の進路希望の実現から逆算して指導計画を見直し、大学入学共通テストの得点率80%以上を目指す授業を実施する。

### ＜取組と自己評価＞

- (1) チャイム始業に始まり、基礎・基本の徹底を図り、思考力、判断力、表現力等の課題解決力や主体的な学習態度を伸ばさせる工夫を、教員個人としても教科としても、地道に行い、授業時間を最も有効に活用する努力を行っている。  
また、前期生にタブレット端末が配布され、多くの授業で有効に活用されている。来年度は後期生にも導入されるが、それに向けて、端末使用授業を軌道に乗せることができた。
- (2) 前期課程において、模試を1回実施した。後期課程においては、模試を4回ないし5回実施した。それらの結果を活用して、その都度分析会を、校長、副校長及び進路指導部、学年、教科担当者参加の下に実施して、分析結果を授業改善に反映させた。  
1学年：毎週の個別の日誌提出を通して起床、就寝、学習時間調査を実施し、必要に応じて声かけをした。HRや2者面談を通して学習への意識付けを継続的に行った。
- (3) 指名制の授業研究や指導教諭による模範授業の参観、校内・校外での授業見学や研究協議への参加、大学入試問題の分析等を通して、授業力の向上を図っている。また、週時程に組み込んだ教科会を活用して、定期的に指導内容や指導方法について議論し、授業力の向上に努めている。
- (4) 各教科で作成した6年間を見通したシラバスに基づいて、5教科の全科目において、大学入学共通テストの得点率80%以上を目指して、指導内容や指導方法を常に改善している。

### ＜数値目標＞

- (1) 指名制の授業研究、指導教諭による模範授業及び予備校での教員対象大学入試問題指導力向上セミナーに56名以上を派遣する。（一昨年度45名）
- (2) 大学入学共通テストにおいて、得点率80%以上の人数を、各教科・科目受験人数の60%以上にする。（前年度61.9%）
- (1) 新型コロナウイルス感染予防の観点から、他校への派遣は行えなかった。指導力向上セミナーへは、32名参加した。
- (2) 2年目となった大学入学共通テストは、予想以上に難化し全国平均点が大幅に低下し、今年度は得点率80%以上の得点者の割合は33%であった。

## 良い習慣の形成

### ＜目標＞

- (1) 生徒の人権を尊重し、生徒理解と信頼関係に基づく生活指導を行う。
- (2) 生徒に予習・復習を前提として授業に臨む習慣を付けさせる。

- (3) 学習に適した校内環境を整備し、時間を有効活用して学習する習慣を身に付けさせる。
- (4) 基本的な生活習慣の形成を支援する。
- (5) 各種検定等へのチャレンジを通して学習意欲を喚起させる。

<方策>

- (1) 生徒の人権を尊重するとともに、「生活のきまり・確認事項(前期課程)」及び「生活のきまり及び留意点(後期課程)」に基づく生活指導を全教職員の共通理解の下に行う。
- (2) 前期課程生徒に「1日平均2時間以上」の家庭学習時間を目標に学習計画を立てさせ、実行を支援する。
- (3) 自習室や学校図書館の利用を推進する。
- (4) 皆勤及び精勤(=欠席・遅刻・早退のいずれかが1回)の生徒に対して表彰を行う。
- (5) 英語検定、GTEC、数学検定、漢字検定等へのチャレンジを通して学習意欲を喚起させる。

<取組と自己評価>

- (1) 前期課程では基本的なルール、マナーを徹底させている。後期課程では前期課程で学んだ基本的なルール、マナーを基に、自分で考えて正しい行動をとること(自主・自立)をモットーにし、生徒理解と信頼関係に基づく生活指導を全教職員の共通理解の下に行った。今後も全教職員の共通理解の下、引き続き生徒理解と信頼関係を築き、生活指導を行っていく。
- (2) 2学年：授業初めの確認テストを行う。  
3学年：Teamsを利用した復習動画の配信。考査前後の解き直しの実施。  
5学年：自分の進路目標が明確になりつつある生徒は自学自習や授業に臨む態度に変化がある。
- (3) 第6学年生徒の学習環境を確保するために週休日や放課後に自習室を開放した。また、SSHやグローバル10の指定校として関連図書を充実させ、フィロソフィーの授業や調べ学習等で学校図書館の利用を促進した。特別選択講座の空き時間にも滞滞なく学習を進めることができるよう、自習室・学校図書館に加え、時間帯を定めて会議室を開放した。
- (4) 2学年：「毎日の積み重ね」で起床時間や就寝時間等を確認し、継続して指導を行った。  
3学年：手帳を活用し週1回、起床、就寝、学習時間を確認し、必要に応じて声かけをした。
- (5) 国語科では漢字検定、数学科では数学検定、英語科では英語検定やGTEC、IELTSを受検させ、客観的指標を基に学習意欲を高めた。検定を受検する生徒も数多く、生徒のチャレンジ精神の向上に効果的である。

<数値目標>

- (1) 前期課程生徒の平日家庭学習時間を1日平均2時間以上にする。(前年度2学期実施生活実態調査84分)
- (2) 学校評価アンケートの項目「私は、熱心に授業や自宅学習に取り組んでいる」に対する生徒の肯定的な評価を75%以上にする。(前年度75.0%)
- (3) 学校図書館における前期生1人あたりの図書貸出数を年間20冊以上にする。(前年度21.0冊)
- (4) 年間皆勤及び年間精勤の生徒の割合を全体で35%以上にする。(前年度30.6%：前期課程48.0%、後期課程12.7%)

- (1) (学年)

家庭学習時間(学力推移調査などより)

	1年	2年	3年	
	3学期	3学期	4月	10月
授業がある日(分)	84	95	115	124
休日(分)	174	164	210	235

- (2) 「私は、熱心に授業や自宅学習に取り組んでいる」に対する生徒の肯定的な評価を79.7%であった。
- (3) 学校図書館における前期生1人あたりの図書貸出数を年間15.0冊であった。
- (4) 年間の各学年の皆勤者、精勤者数は以下の通りである。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
年間皆勤者数	91	53	64	45	23	9
年間精勤者数	41	38	55	16	18	7
在籍数	159	160	159	155	155	158

**進路指導**

<目標>

各学年に応じた進路指導体制を充実させる。

<方策>

- (1) 6年生対象

ア 進路希望調査、進路面談、大学別解説会、国公立大学出願指導を実施する。

イ 大学入学共通テスト対策講座、私立大学入試対策講座、国公立大学二次試験対策講座、大学入学共通テスト実戦模試、難関国立大学模試添削指導を実施する。

ウ 週休日等も含めて自習室を開放し、生徒が自ら学習する環境を整える。

<p>(2) 4年生・5年生対象 ア 進路希望調査、研究室訪問、大学模擬講義を実施して進路に対する意識の高揚を図るとともに、模試等を通して学力の推移を把握し、面談等による個別指導に活用する。</p> <p>(3) 前期課程生徒対象 ア 職業調べ、職業講話、職場体験等を通して職業観を育成し、「なりたい自分」の目標を設定させ、進路決定への道筋をつくる指導を行う。</p>
<p><b>&lt;取組と自己評価&gt;</b></p> <p>(1) 6年生は、年間を通して2者面談および3者面談を実施し、生徒、保護者との意思疎通をはかりながら進路指導を行った。6学年生徒の学習環境を確保するために、週休日や放課後に自習室を開放した。 ア 4月と10月に実施した進路希望調査の結果や模擬試験の結果を通して把握した生徒の進路希望を基に、秋までに3回面接指導を行った。共通テスト後には、学年担任と進路指導部共同で、全生徒を対象とした出願指導検討会を実施した。こうして教員の目線合わせを行った上で、担任から生徒へ出願指導を行った。 イ 12月の期末試験後から1月の共通テスト前まで共通テスト対策演習を行った。共通テスト1週間前に当日と同時程での共通テスト実戦模試を実施した。 ウ 多くの教員の協力により、土日を含めて自習室及び教室を使用できるようにして、生徒が自ら学習する環境を提供した。</p> <p>(2) 4年生・5年生は以下の取組を行った。 ア 11月には大学研究室訪問を、12月には大学模擬講義を実施して、生徒の進路意識を喚起している。 イ 5月と2月に河合塾全統記述模試を実施し、10月には進研模試を実施した。1月には実際の共通テストの問題を使用したリアル共通テスト模試を行った。</p> <p>(3) 1年・3年は以下の取組を行った。 職業調べや職業講話「東京寺子屋」を通して前期課程における職業観育成を図った。 1学年：1年次に職業調べ、職業講話「東京寺子屋」を通して前期課程における職業観育成を図った。 3学年：職場体験は中止になったが、事前学習を2回、進路講話を1回実施した。</p>
<p><b>&lt;数値目標&gt;</b></p> <p>(1) 大学入学共通テストにおいて、 5教科7科目型の受験者を111名（在籍者の70%）以上にする。（前年度118名、76.1%） 5教科7科目型の受験者のうち、得点率80%以上の者を60%以上にする。（前年度61.9%）</p> <p>(2) 国公立大学現役合格者を60名以上にする。（前年度77名） うち難関国立4大学及び国公立大学医学部医学科現役合格者を35名以上にする。（前年度45名）</p>
<p>(1) 大学入学共通テスト 本年の5教科7科目型の受験者は昨年より14名増の132名で、在籍者158名の83.5%であった。本年は共通テストの導入2年目で難化が予想されたが、予測よりはるかに大幅な難化が見られた。数学I A・化学・生物・日本史Bは前身のセンター試験時代を含めた33年間で最も全国平均点が低くなり、他の教科も含め、全体の2/3以上の教科・科目で平均点が下がった。そうした状況において、本校の900点型受験者でも、昨年17名いた得点率90%以上の者は1名(0.8%)、44名いた得点率85%以上の者は18名(13.6%)、78名いた得点率80%以上の者は44名(33.3%)と経営計画の数値目標を達成することができなかった。しかし、この事態は全国的なもので、各予備校が出している各大学の合格判定ラインは、従来の数値を約50点も下回っており、これは前代未聞と言える状況である。</p> <p>(2) 国公立大学・私立大学の合格者数 国公立大学現役合格者は86名、現浪合わせて94名である。大学校を含むと現役87名、現浪95名。そのうち、難関国立四大学及び国公立大学医学部医学科の現役合格者は44名、現浪合わせて50名。防衛医科大学校を含むと現役45名、現浪51名。内わけとしては、東京大学の現役合格者が19名・現浪20名、京都大学が現役4名、一橋大学現役9名、東京工業大学が現役3名、現浪5名、医学部医学科合格者は現役9名、現浪12名で、防衛医科大学の現役合格者1名が加わる。 私立大学現役合格者は、現役417名、現浪で469名であった。早稲田大学が現役60名、現浪66名、慶應義塾大学が現役33名、現浪35名となっており、医学部は現役13名、現浪18名で、また、海外大学は現段階で現役2名(5大学)となっている。</p>

## 募集・広報活動及び地域交流

<p><b>&lt;目標&gt;</b></p> <p>(1) 募集・広報活動を一層推進し、本校の求める応募者の増大を図る。 (2) 全教職員の連携・協力の下に募集・広報活動を推進する。 (3) 本校の特色を表す体験授業を実施する。 (4) 災害などの非常時に対応できる資質・能力を高める。</p> <p><b>&lt;方策&gt;</b></p> <p>(1) ホームページを通じた教職員の情報発信能力を高めるとともに、更新頻度を高め、内容を充実させて、本校の特色ある教育実践を積極的に発信する。 (2) 全教職員の連携・協力の下、授業公開、学校説明会等を実施し、本校の特色ある教育実践を積極的に発信するとともに、本校の求める応募者の増大を図る。 (3) 小学生対象の体験授業「理科実験教室」や「部活動見学会」を実施する。</p>
--

<p>(4) 防災教育推進委員会を活用して、警察や消防、町会等から避難訓練や宿泊防災訓練に関する助言を受けるとともに、それらの改善・充実を図る。</p>
<p><b>&lt;取組と自己評価&gt;</b></p> <p>(1) 年間を通してHPの新規ページ作成と更新を3月4日時点で277件（内、業者委託103件）行った。また、2月からは保護者向けに日々の学校の様子や連絡事項をHPに掲載するシステムを構築して運用を開始した。</p> <p>(2) コロナ禍のため、授業公開、学校説明会は行わなかったが、6年生児童を対象とした学校見学会を年3日12回実施し、650組が参加した。学校説明の動画を8本、部活動紹介の動画を2本、実験観察に関する動画を6本新規に作成してHPで公開した。再生数は3月4日までに計16460回再生された。</p> <p>(3) コロナ禍のため、理科実験教室、部活動見学会は実施できなかった。</p> <p>(4) 防災教育委員会において大規模災害発生の際の対応について警察や消防から助言を受け、避難訓練の計画に反映した。</p>
<p><b>&lt;数値目標&gt;</b></p> <p>(1) 授業公開、学校説明会、体験授業等の合計来校者数をオンラインでの参加者を含め、5000名以上にする。（一昨年度6541名…昨年度は感染症拡大のため来校による学校説明を実施せず。）</p> <p>(2) 一般枠募集と特別枠募集の合計応募者数を800名以上にする。（前年度796名）</p>
<p>(1) 学校見学会の参加者数は1300名、教育機関対象の学校説明会の参加者は51名、希望者を対象とした学校説明会代替としての学校紹介資料の郵送は3月4日時点で395通であった。</p> <p>(2) 一般枠募集と特別枠募集の合計応募者数は713名であった。</p>

## SSH

<p><b>&lt;目標&gt;</b> 課題発見力、創造的思考力、継続的実践力を高め、国際社会でリーダーとして活躍できる科学的人材を育成する教育の研究開発を行う。</p>
<p><b>&lt;方策&gt;</b></p> <p>(1) 「小石川フィロソフィーVI」について、今年度の学習を計画的に実施するとともに、次年度からの学習についての計画を早期に進める。</p> <p>(2) 「小石川セミナー」及び「サイエンスカフェ」を一層充実させる。</p> <p>(3) 「小石川フィロソフィー」など様々な探究活動に取り組みせるとともに、研究発表会等で発表を行わせる。その際、英語による論文作成や研究発表（ポスターセッションを含む）にも取り組みさせる。</p> <p>(4) 「小石川フィロソフィー」の継続研究を支援するオープンラボの充実を図るとともに、研究者や大学院生などによる課題研究メンターシステムを開発する。</p> <p>(5) 国際科学コンテスト・国際科学オリンピック等に挑戦する生徒の取り組みを支援し、科学的思考力をもったグローバルリーダーを育成する。</p> <p>(6) 大学との連携を強化し、「生命科学実験講習会」及び「グローバルサイエンスキャンパス」等への生徒参加支援を行う。</p> <p>(7) 小石川フィロソフィー担当者会議やカリキュラムマネジメントのためのワークショップ型校内研修を活用して、教員の指導力向上を図る。</p>
<p><b>&lt;取組と自己評価&gt;</b></p> <p>(1) 研究分野に基づき、国語・社会・数学・理科・英語・体育・芸術の7講座のいずれかに属し、6年間の課題研究のまとめと成果の発信を行った。課題研究を振り返り、要旨・論文を作成した。また、研究成果を各講座やクラス内で発表することに加え、今年度より5年生に対し課題研究の取組を英語で伝える校内発表会を実施した。 全校生徒参加によるオンラインの校内発表会では、小石川フィロソフィーVI各講座の代表が発表し、後輩へ成果を継承した。研究要旨は、「研究概要集」にまとめ、6年生全生徒へ配布するとともに、課題研究に携わっている教員、在校生が自由に閲覧できるようにし、6年間の成果を全校に広げた。</p> <p>(2) 「サイエンスカフェ」を、対面とオンラインで年7回実施した。大学や企業の方による最先端の研究の講義に加え、「小石川の学び」をテーマに、卒業生がSSH事業で得た学びを在校生に伝えるサイエンスカフェを実施した。</p> <p>(3) 以下の内容で、「小石川フィロソフィーI」～「小石川フィロソフィーVI」を実施し、課題研究の取り組みを深めた。</p> <p>①「小石川フィロソフィーI」…国語科教員による授業で、基本的言語スキル（話す・聞く・読む・書く）力、意見構築力、思考整理法などの複合的言語スキルを育成した。</p> <p>②「小石川フィロソフィーII」…数学科教員による、実験を取り入れた授業で、統計学スキルを育成した。</p> <p>③「小石川フィロソフィーIII」…プレ課題研究講座として位置づけている。9講座に分かれて年間を通して課題研究を行った。3月には、オンラインによる発表会を実施し、1、2年生が見学した。</p> <p>④「小石川フィロソフィーIV」…情報科の教員によるクラス単位の授業で、問題解決の手法、プレゼンテーションの手法、プログラミング情報技術を習得した。また、問題発見と解決に効果的に活用するための科学的な考え方を育成した。</p> <p>⑤「小石川フィロソフィーV」…14の講座に分かれ、年間を通して高度な課題研究を行った。2月にポスターセッションを含む発表会を学年内で実施した。要旨を英語にまとめ、「ライティングワークショップ」で全員がALTによる個別指導を受けた。</p> <p>⑥「小石川フィロソフィーVI」…(1)の通り実施した。</p> <p>(4) 「小石川フィロソフィー」や「サイエンスカフェ」及び化学研究会などで大学教員や大学院生を招き、研究のアドバイスを受</p>

<p>けた。同窓会の協力を得て、SSHに関する卒業生追跡調査を実施するとともに、メンターバンクのシステムを開発し、登録を開始した。</p> <p>(5) 国際化学オリンピックにて、5年生が日本代表に選出され、銅賞を獲得した。また、4年生が日本生物学オリンピック、日本情報オリンピック女性部門、日本数学オリンピックで本選に進出し、日本代表候補者になっている。中学生科学コンテストでは、2年生チームが東京都代表に選出され、全国大会である科学の甲子園ジュニアで総合優勝した。</p> <p>また、課題研究のコンテストでは、東京都日本学生科学賞中央審査では3年生が科学技術政策担当大臣賞を受賞し、5年生が入選3等となるのをはじめ、各コンテストに積極的に参加した。</p> <p>(6) 1月にお茶の水女子大学と連携し「生命科学実験講習会」を実施した。グローバルサイエンスキャンパスには4年生が東京大学のプログラムに参加した。また、Diverse Link Tokyo Edu事業に5年生が参加し、東京大学の教員から1年間継続して課題研究の指導を受けた。高大連携・共同研究に関する協定を結んでいる東京農工大学とは、科学系部活動・課題研究の指導で継続的な連携を図っている。</p> <p>海外とは、イギリス（ウェールズ）カーディフ大学とオンラインによる研修を実施した。3年生～5年生が参加し、現地教授による理数系講義や、課題研究の発表を英語で行い、アドバイスを受けた。</p> <p>(7) 「小石川フィロソフィー担当者会議」を計7回開催し、課題研究の評価・指導に関する情報交換を実施した。</p>
<p>&lt;数値目標&gt;</p> <p>(1) 前期課程1学年及び2学年の理科において、実験・観察を扱う授業を7割以上にする。(前年度7割以上)</p> <p>(2) 「オープン・ラボ」や「小石川フィロソフィー」等における英語による論文の作成件数を40件以上に する。(前年度27件)</p> <p>(3) 英語による研究発表を50件以上行う。(前年度50件)</p> <p>(4) 「サイエンスカフェ」を10回以上実施する。(一昨年度10回 昨年度コロナのため1回)</p> <p>(5) 国際科学オリンピック予選等に150名以上挑戦させる。(前年度150名)</p>
<p>(1) 前期課程1学年及び2学年の理科において、実験・観察を扱う授業を7割以上実施した。</p> <p>(2) 「小石川フィロソフィーV・VI」の講座を中心に、31件の英語による論文を作成した。</p> <p>(3) 小石川フィロソフィーⅢ・V・VI校内発表会・SSH海外研修を中心に、英語による研究発表を74件実施した。</p> <p>(4) 「サイエンスカフェ」を7回実施した。</p> <p>(5) 物理チャレンジ、化学グランプリ、日本生物学オリンピック、日本地学オリンピック、日本数学オリンピック、ロボカップ、日本学生科学賞に合わせて計140名が参加した。地学オリンピックには、24名が応募し、1次予選に5年2名、4年2名、2年1名が通過し、4年1名が本選出場した。本選は、3月下旬に実施する。</p>

## 国際理解教育の充実

<p>&lt;目標&gt;</p> <p>(1) 国内語学研修、海外語学研修及び海外修学旅行に共通な目標を設定して、教育効果を高める。</p> <p>(2) 国際交流を推進する。</p> <p>(3) 海外の大学や高校への留学に関わる情報提供及び進路指導を行う。</p> <p>(4) 本校の概要を英語で広報する。</p> <p>(5) 国際的な課題について、英語で思考、発表できる力を身につけさせる。</p> <p>&lt;方策&gt;</p> <p>(1) コミュニケーション・ツールとしての英語力を高めるという共通の目標の実現に向けて、国際部が海外語学研修及び海外修学旅行の企画・立案を行う。</p> <p>(2) 海外からの生徒や教員を積極的に受け入れる。</p> <p>(3) 国際部を中心に、外部関係機関をはじめ、各分掌、学年、教科等と連携して、留学ガイダンスを実施する。</p> <p>(4) 英語版の学校案内を国際交流や海外語学研修、海外修学旅行などの際に配布する。</p> <p>(5) 英語ディベートコンテスト等へ、積極的に参加する。</p>
<p>&lt;取組と自己評価&gt;</p> <p>(1) 2年国内語学研修は日帰り3日間実施。3年海外語学研修は中止になり、その代替の国内語学研修を4日間実施。5年海外修学旅行は中止になり、代替としてシンガポールの交流校(2校)とオンライン交流実施。英語力を使って、多様な文化や価値観に触れ、受け入れることができる人材の育成を共通の目標とする。</p> <p>(2) グローバルカフェやエンパワーメントプログラムを通して留学生との交流を行った。また、南オーストラリア教育省や各種交流事業団体と連携を図り、来年度以降の国際交流再開に向けて準備を進めた。</p> <p>(3) 留学ガイダンスを実施し、次世代リーダー育成道場留学プログラムの概要説明と募集を行った。その後、校内選考を行った。また、外部関係機関と連携を図り、留学する生徒の支援をした。</p> <p>(4) 英語版学校案内の改訂版の作成準備を開始した。</p> <p>(5) 5年生が高英研スピーチコンテストに出場し、優勝した。パラメンタリーディベートコンテストに出場した。</p>
<p>&lt;数値目標&gt;</p> <p>(1) 3学年末までに英検準2級以上を取得する生徒の割合を95%以上にする。(前年度95.0%)</p> <p>(2) 4学年末までに英検2級以上を取得する生徒の割合を80%以上にする。(前年度85.0%)</p>
<p>(1) 3学年末までに英検準2級以上を取得している生徒は86%である。</p> <p>(2) 4学年末までに英検2級以上を取得している生徒65%である。</p> <p>(これらの数値にはGTEC、TOEIC、IELTSなどで同等レベル(CEFR)を獲得した人数を含んでいない。)</p>

## 2 次年度以降の課題と対応策

### (1) 学校運営

新型コロナウイルス感染症対応の長期化によって、来年度以降も教育活動の制約が生じる可能性があるが、学校の組織的運営やOJTの推進による教職員の指導力の向上、ICTの活用など様々な方法を工夫して、教育活動の質の下がることのないように取り組んでいく。特に教育課程については、学習指導要領の改訂に伴う新しい教育課程となることから、「指導と評価の一体化」、「観点別評価の適正な実施」、「カリキュラムマネジメントによる教育活動の質の向上」など組織的に取り組んでいく必要がある。

小石川教養主義、理数教育、国際理解教育を引き続き推進するとともに、第4期SSHで計画している先端的な課題探究学習を全校をあげて推進していくとともに、その成果を地域に還元して地域連携を進めていく。

学校運営をめぐるICTシステム刷新され、後期課程での生徒一人一台端末が施行されることから、円滑に新しいシステムに移行していくことができるように、校内研修などを実施し、教職員のスキルを高めていく。

生徒、保護者への情報提供の方法を検討し、紙媒体だけではないICTを適切に利用した連絡手段を組織として確立していくため、担当部署と学年との検討を進めていく。

### (2) 進路指導

調査書の記載方法に関する資料をまとめ、作成方法の統一を図ることができた。調査書の発行については、来年度も進路指導、教務、学年、経営企画室が協力して発行できる体制を継続していく必要がある。

進学する目的を生徒に考えさせ、進路希望を明確にする指導をとおして、進路希望を実現している生徒が増加した。難関国公立大学や医学部に進学を希望する生徒の進路実現を図るために、各教科での入試問題を分析し、次年度の進学指導に生かす取り組みを行っていく。

### (3) 学習指導

年間をとおして、研究授業や相互の授業観察を実施することで教員の授業力向上に努めた。多くの教員が参加して授業力向上に努めた。生徒にとって魅力ある授業を実施できることは、本校の教育活動の根幹である。ICT機器を活用した反転授業、ホワイトボード機能を利用した意見共有やグループ討議など、様々な工夫を行うことで、思考・判断・表現を高める学習活動に生かすことができている。今後もこうした努力を続け、指導と評価の一体化を図り、学習指導全体の質の向上を目指すことが求められている。また、後期課程で実施する観点別評価の精度を高めていくことが大切である。

### (4) 生活指導

コロナ感染予防を徹底することで、校内でのクラスター発生を防止し、通常の授業を継続実施することができた。次年度についても感染予防を継続する中で学校行事の充実を図っていく。宿泊行事を実施することができなかったが、次年度も計画に従って準備を進め生徒の学校生活への意欲を高めていく。

今年度始めた特別支援学級（通級指導）の成果から、来年度以降も取組を継続していく。また、ソーシャルスキルの重要性についても引き続き取り組んでいく。

### (5) 地域連携

職場体験やSSH指定校として成果を普及する活動をとおして、地域との連携を図っていく。今年度は、新型コロナ感染予防のため、満足のいく活動は実施できなかったため、次年度は感染予防対策を行った上で実施を検討する。